

’23福島県現代詩集

福島県現代詩人会

赤松 幹彦

家族の肖像

リヴィウの荒れ果てたシナゴーグで

一枚の写真を見つけた

散乱した煉瓦と木片の下にあつた古い印画紙
そこには肩幅の広い青年と微笑む妻

そして小さな女の子が写っていた

旅人よ

それは私の家族写真だうち捨てられ忘れられ顧みられることのなかつた青春の日々誰が忘れようただその記憶のみが私を生かしめてきた妻の柔らかな肌の温もり膝の上のはにかむ娘の重さ誰にも奪えない私の記憶

あなたは一人の娘と恋に落ちた
娘はあなたに香しい黒髪とすらりの伸びた身体

豊かな乳房を与えた

ゲットーが破壊されたそのときまで

今もオフィシエンチムの

撤去されたバラック群の片隅に

あなたの妻は眠る 眠っているだろう

旅人よ

だからこそ、私は、私の家族の肖像を描きたい
のだ描くそれは言葉ではなくスケッチですらない
二十歳と二歳で奪われたいのちのありかを私の
心に透明に刻んでいく妻が見せた小さな仕草
その美しさを私以外の誰が知るというのか壊された壁の下で息絶えていた娘の顔を誰が記憶しているというのだ

それは
私だけの家族の肖像

二十年に生まれたあなたは

少年のときホロドモールを生き抜いた

餓死した兄の肉を食べて生き延び

ドイツ人が解放軍に見えた一瞬の夏

浅井たけの

傾く天秤

蝉の声が聞こえない今年の夏、七月。

軸が軋み

心の天秤が傾いたまま

初夏から盛夏へと日時は閉じていった。

毎年、庭から生まれていく蝉の
鳴き声もまだ、聞けずにいたら
庭木の葉と庭草の茎に
三個の空蝉がしがみついたまま
無言で残されてあるのを見つけた。

ジジジーッと産声も上げずに

静かに飛び立つていつたのか

平常の夏の日ではない気候の中で

やつと生まれて

祖先の山へと帰つていったのか。

合歛の花が季節通りに咲き出し
息子の命日も淡々と過ぎていき
愛猫の四十九日も、もうすぐいく。
黙々と捲られていく日捲り暦の
薄い紙片のような
ペラペラと揺れているだけの
天秤皿の上の
わたしの魂。

炎天

灼熱

そして雨、また雨。

安部 一美

連用日記

「もういくつねるとお正月。*

と歌つたのはとつくの昔のこと

十月下旬久し振りに

行きつけの書店に出掛けると

新しい年のカレンダーや日記帳が

平積みにされている

參寿を過ぎるこの歳まで

何冊の日記帳を使ったことか

近年は連用日記を使っているが

これは一冊の年数により

一日分の書きスペースが異なり

三年、五年、十年の種別がある

これを使う人は

何を基準に選ぶのだろうか

日々の行動記録の手軽さか

過ぎ去った同一日の内容比較か

何か因縁染みたものが
潜んでいないか

迷った末に今回は

三年ものの日記を買って帰ると

妻が誰に言うともなく

あと何冊買うことにと独り言

それはそうだ

それよりこの日記帳だつて

使い切ることができるかどうか

当人だつて分からぬのだ

体のあちこちが壊れ始めており

リタイヤしてからめつきり

体力に自信を無くしている

口には出していないが

「唄を忘れたカナリヤは・・

どうされるのだっけ

* 東くめ作詞 滝廉太郎作曲の童謡
** 西条八十作詞 成田為三作曲の童謡

阿部 正栄

祈り

落ち葉の音がいたい 青い空が見えない
あなたが倒れた日から 私は季節を忘れてしまい
その中で紙をつかむ

紙は重くしめりを帯びる

景色はひからび

道はかたむく

それでも あなたの物語がつづくようにペンを持つ

犬が吠えている（あなたにはきこえない）

冷たい零がおちた（あなたは頬杖をついているだけ）

動かない半身は 微睡まくびみの沼に浸したままだが 気の遠く

なるあなたの道に疲労の石を散らしてきた（のは私）

寡黙になる私を見ると

あなたはゆつくりと車いすを動かす

しかも半身に笑みまでたたえて

それを支える右足は もう目を閉じた私の中でしか動かない（のか）

あなたのことばが聞きとれなくて悲しませてしまったとき
私は部屋を彷徨さまようことしかできない

いや あなたのことばは 私に届く前に 澄みわたった空へ 吸い込まれている（のかもしれない）

車いすをおす ひぐらしの中を 蛍の中を はかないもの
の奥にあるのは光
光の中へ あなたを背負って行く（そうしてもらったよう
に）

あなたの涙声が

くりかえし くりかえし

神を呼ぶ うたになる。

薪たきぎをひろう右手 白菜を漬ける右指

あべ和かこ

あとかた

見えている宇宙を説明できる物理の理論がある

けれどもそれは今も膨張し続ける宇宙の
五パーセントにも満たない部分の理論だという

それはガリレオやニュートン

そしてAINシユタインを基礎に

物理学者の大きな頭脳が結集して導き出されたもの

ただ、それらの研究の奥に垣間見えるのは

美しい理論の外側の九十五パーセントの世界

地球は宇宙の中の小さな星屑

ある日、マリーが

生まれ育った五パーセントのこの宇宙から

九十五パーセントの宇宙へと移動した
ぼっかりと大きな虚無を私に残して

素敵なものマリー　かけがえのない友人だった

大好きな柴犬と戯れ、優しい人たちを道端に引き寄せて

あなたは愛の世界を一枚の写真として私に焼き付けた
ふわーと揺れたフレアスカートは
あなたの五パーセントの舞台の幕引きだつた
雲はしばらく、夕陽に向う鮮やかな天使の姿を私に見せ
瞬時に虚無の形に姿を変えた

計れない時間、いたまなさが私の全てを覆っていた

ふと窓辺に舞い込んだ風がレースのカーテンを
ふんわりと舞い上げ、裾の重りが

マリーのための窓辺の花のガラスの花瓶に優しく触れる
あなたが愛したティンシャの音を響かせて

「私はここにいるよ」

マリーが来てくれたのだと思った

九十五パーセントの世界の幕開けを開示するように

見えている宇宙はぎゅっと集めると

わずか一個分のリンゴの大きさだ

マリーはこの一個のリンゴを俯瞰しながら
開放された魂で愛を響かせて来るのだ

私はもう少し　この五パーセントの世界で

詩を紡いでゆこう　祈りを込めて

奇跡のリンゴに僅かでも光が届きますようにと

伊藤 俊晴

墓の建立

四〇年前 一九八三年三月

福島医大小兒科を辞する時

郡山市と会津若松市を提示され

会津若松市を選択した

会津をついのすみかとする覚悟

一九九五年四月 会津若松市内に開業

以来二八年 長男は小兒医 次男は内科医

三男は当院の事務職

これまで両親を見送り おじおばを見送った

母を見送ったのが二〇〇八年（享年八七歳）

母の最後の一ヵ月間の担当医は私の次男

次男が居たので会津で母の最期を見取れた

私も古希を過ぎて今後は自分達のこと
知り合いのお寺さんに墓の建立を相談

二〇二二年十一月七日伊藤家の墓を建立

もちろんまだ誰も入っていない

これが私の覚悟

この会津の地におのれを埋める

今のところ建立の日を命日として

生前供養をしていく

願わくば十年の猶予を願っているが

生命のはかなさを知るが故

思い通りにいくかどうかは解らない

私と妻のついのすみかは整えた

岩田 武昭

「イチエフで拾ってきたんじゃないのか?
誰かの一言にドキッとした

UFOの断片

そそられる記事だった

「UFOの断片が初公開!」

「福島市で特別企画展開催!」

私は行かなければならぬと思った

2021年6月にアメリカの国家情報長官室から
UFOの目撃情報とその脅威に関する報告書が
公表されて以来UFOの断片への信憑性は
高くなっていたが不安はあった

【月刊ムー】とのコラボレーション企画

それがフェイクかどうかは

現物を見た人にしか語れないので

ためらうことなく入場料を支払った

破片は灰色でわずか1センチ角

微量の放射能を帶びた薄い金属片

写真撮影は禁止ということで

画面夫婦

真贋かどうかの判断は2019年に
アメリカで採取した状況のみだが
入場者は後を絶たない
国があてにならない以上

宇宙人の高度な知能で
イチエフをなんとかしてもらいたい
福島県民はUFOに救われたいのだ

仮面を被つて話をするのと
スマホの画面を通して
話をするのは同じだ

もう好きではないけれど

まだ嫌いではない

画面を通じた話のほうが
穏やかなのはもう冷戦だからか

冷戦のほうが平和だったと
子どもに言われる日が怖い

大山いづみ

朧月に想う

心にはかさぶた

朧月の朝霜に

冷たき風は

思い出を凍てさせる

海に会いにきた

砂浜に足跡は残らない

それでも笑うんだ

今日も胸を張り

人間界を堂々と歩く

心の羽は折れてなどいない

大地踏みしめ舞いながら

飛ばされ 私を

幸せという感情に

連れて行つてくれる

私が笑うと

周りも笑顔になり

嬉しくなる

今年ももうすぐ終わる

新しい年も

笑顔を

この海に投げかけたい

笑顔は自分への応援
今を精一杯生きるため
声を出して笑う
抉られた心は

菅野 昌和

78年前の子守り歌

石井村は

県北安達郡の村

今は無い

6才頃になると

口減らしに

守りつ子にかし出される

背の赤子が泣くと

共に泣くしかなかつた

すると背の子は泣き止む

美しいメロディーの子守歌では

背の子は泣き止むまい

泣いている人がいたなら

その手にさわって

共に泣いてやれば

それだけでよい

風の唄

それが「海」だと教えられぬ遠い昔
僕たちは想い一つで見つめていた

果たしてその時

想いは深紅であつたか
何よりも深く強かつたか

※1

それが「空」だと名付けられぬ遠い昔
僕たちは心一つで眺めていた

心は群青であつたか
何よりも広く澄み切っていたか

それが「風」だと感じられぬ遠い昔
僕たちは心一つで吹かれていた

果たしてその時
心は透き通っていたか

何よりも純に舞うことは出来たか

それが「俺」だと実感できぬ遠い昔

俺たちは胸の奥でもがいていた
果たしてその時
想いは真紅であつたか
何よりも熱く燃えていたか

フキノトウを嗅いで／茶葉をぱりぱり食べて／緑の命を食べた春を越えて／あの子が間もなく逝ってしまうような夏／ひたすらに母は土に触つていたい／サンドマメを生で齧り／ノビルをがりがり噛んで／バジルをぱりぱりと食む／あの子を齧りたいコロナで会えない夏／張り裂ける自分の心を／ぱっくり飲み込む術を探し／戦い抜く強い言葉を探して残酷な八月を越えて／あの子がパソコンに遺した詩集を編む

古里のカイドウリンゴが我が庭に実る秋／父よ母よ／なじよたらいい／池坊の教えが聞こえる晚秋お足元はきつちりしましよう／裾が乱れではなりませぬ／言葉を反芻しながら庭木の剪定をする／心をすくと立てなさい／きつちり生きた請戸のお家元が天から囁く22年／風の唄が聞こえる

終りなど知らぬ者の方に　※2
始まりを告げる風が吹いている
もう行かなくては

※1 「風の唄」齊藤柳一郎「そのままの姿で」
※2 同 「風1」

小さき掌てのひら

悔恨がきつくしめつけてくる
始まつたものは必ず終わると
繰り返される 戦争があつて
幾つも 大きな戦争があつて

発車する 列車の窓で
震えているくちびる
窓辺に立つてすがるよに
濡れてるよな瞳
張りついている

もみじのよな小さき掌

夜 音が聞こえたの
空に光が走ったの
怖かつた

戦争が戻ってきたんだつて

夜の音 見上げた眼に映つてしまつた
怖い戻つてきた戦争
砲撃と 閃光の中に 消えて行つた夢

母と一緒に入つていた浴室の
窓に張りついていた茶色の蛙
幸せな 短すぎた 幼年時代
童話の影絵 夢の世界のよう
に耳にひびいていた 蛙の合唱カクソウに

銀河が流れ斜めに過る流星群
窓ガラスに 何十万とも言う
張りついていた 小さき掌
何処へ拉致されて行つたのだ

撃ち込まれた砲弾に怯えながら
連行や抑留に 追われながら
幼き命の星列は 尚
瞬く銀河の流れの下を彷徨うか

齊藤 貢

じつと静止したままです。

ひとは、懐かしい名前を
遠いところへ置いてきたので
川も、とうの昔に

名前をどこかに忘れてしまったのでしょうか。

これが夢であつたなら。

こんな夜更けに
名なし川を泳いでいるのは誰？

月のひかりに、透明なからだを抜いて
遠い彼岸まで
わたしを連れていくのでしょうか。

冷たい水に入ると

死者たちで川はあふれます。

名なし川は、夜の闇とつながつていて
流れに吸い込まれたひとは

冥府の底から、誰も戻つてきませんでした。

高い空では

夕方になると、きまつて

見知らぬひとの名が

読経のように読みあげられます。

名なし川には

こどもの頃の夕陽がいくつも沈んでいきます。

いつまでも、

この川を背負つていくのですね。
小枝の先にぶら下がつた蜻蛉のように
遠めがねのレンズの向こうで
あの日から

さとう公子

摘み草

春になると摘み草をした

まだ雪の溶けきらない

畑の土手から

田んぼの土手から

ふきのとう

ナズナ

せり

あかざ

スペリヒュウ

よもぎ

たんぽぽ

ユキノシタ

土の汚染によつて

今後、口にすることはないでしよう

胡麻和え

天ぷら

漬物

季節には一度は食卓に出した

覚えてほしかった

子供たちに

野山には食べられるものが、いっぱいあることを
何かの時には、命を繋ぐものになることを

小さいころ食べた野草など

子供たちは、とうに忘れたろう

かつて摘んだ、みずみずしい命

あれは、村の幻想になるのです

(除染は、田、畑の土手、山林は除染対象外になつています)

澤 夏子

追憶



母が

こひしい

沢田部落の
多勢寺境内には
小沢田太子堂跡から出土した
宝篋印塔がある

一一九〇年代中島に田子薬師を
祀つた後に建てられたもので
ないかと言われている。
では、寺守はだれ?
次の歌が気になる

声をだに聞かで別るる魂よりも
亡き床に寝む君ぞかなしき

古今和歌集
858

よみ人しらず

人は思い出に生きる

そう思ふのは、私だけなのだろうか。

花は何を信じて

咲くのだろう

彼岸花

夏子

鈴木 正一

もの言わぬ祠

ため池には 魚も釣り人もいない
餌をやつていた白鳥も こない
隣接している雑木林の 山栗、玉子茸

タラの芽、山ウドは 食できず
山桜は咲くも 鶯の鳴き声は僅か

ため池と雑木林は
四季折々の 恵みの宝庫

核災（原発事故）は
生きとし生けるものからの
日ごろの小さな喜びさえも

強奪

ため池の 土手片隅に
石造りの祠がある

その裏に刻まれている 建立記

「葉山神社宮再建

昭和五十八年十一月吉日

発起人 区長 桑原 昆吉

鈴木 実

高橋伊三郎

社宮寄付者

古希記念

菊池 コト
還暦記念

岩野アヤ子
石工

吉田石材店

岩野アヤ子書

刻まれた九名は 三・一一以前に逝去
誰も居ない時をひとりで過ごし なに想う
もの言わぬ祠

守り続けた 地区の家々と土地

三・一一の時は 四〇三世帯 九六八名
一年経過して 家々は取り壊され

土地は草ぼうぼうの荒地に

今は 二一世帯 三二名に

守り続けた家々と土地を奪われた 祠

私は 核災棄民

祠は 核災棄神か

寂しげに たたずむ

もの言わぬ祠

岩野 聖明

大和田好男

斎藤 十四

向山 政代

空野 禅

九月下旬

二年間も花をつけずにいたのに……

あの香りが箱庭に戻ってきた

“ありがとう”

“うれしいな”

ハナミズキは

赤い実を沢山つけて

葉を落としはじめている

桜

つり花の葉も

“さようなら”

“また来春ね”と

枝から離れていく

秋晴れの

雲ひとつない空の下に立ちすくみ

スイスイ飛んでいる

アキアカネを

時折 見上げながら

私はまた

ふるさとのひと齣一玉を思い出す

今

あつたかい日射しに
箒を抱えたからだが

ふるさとの金木犀の香りに
浸るかのようだ

掃き手を止め顔を上げると

金木犀が淡いorange色の花をつけ

香りを放っていた

新たな生活圏の中で
居心地のいい安らぎが
恵みのように降り注ぐ

高坂 光憲

ほんすけ

ゆあさ先生に言われる前から

私はほんやりのほんすけだったが

こころの底ではそんなに思つたことはなかつた

教室の窓の外を見ている子なんてごまんといいる
通信簿に、飽きっぽい協調性に欠けると書かれた

私の飽きるは「もういいよ」の意味だったが

母のお説教はその通信簿の請売りだつた

二階の音楽室の瓦屋根の雀の巣は

私だけの秘密だつた

ゆあさ先生は私のよそ見を

バケツを持って廊下に立つことにすり替えた

夏休みの北町のつくいし橋の下で

箱メガネで川底を覗いたとき

水音はとおく耳の奥へ引いてゆき

私は鰯の斑点やオイカワの体側の虹いろにときめいた

河原の石や流木、アマゾンのインコの羽、孔雀の尾羽、新聞の切抜き、菓子の空箱、綺麗な包装紙、紐、繭倉庫の繭袋、ナナ・ムスクーリ、箱入りの中島百式プラモ、シーグラス、松田九段の色紙、篠笛、等々これらはいつかよそ見する時のガラクタで、経年の物置にしまつたままきりもないのだが、その雑然は今も進行中で「もういいよ」ではない

橋本先生の憲法原論、原田先生に教わった政治学原論

その辺りを思うときほんすけという私の習いでは

このくにはがさつですこし生きにくそうな気配がする
だからなのかこの頃世間さまは程合いで籠りきりで
むかしのよう安保法制反対のデモをしたり

機動隊とにらめっこをしなくなつた
易くぜつぼうはすまい

そのいみがもつ戦慄は

信管のついた滅びの予感のように

教室の窓の空を飛び、つくいし橋の箱メガネを超え

私のところにくすぐる

今のリアルを見留めるだけだ

出来もしない取り掛かるとも覚束ない石や羽や紐を
ほんすけの私は只ほんやりと且つ目まぐるしく思う
まるで私が書いてきた詩編の日々のように。

高野 良一

公園で

すぎた日を想い出して

私は 見た

ある日曜の朝

公園で

少年がひとり

ブランコにゆられているのを

こわれた噴水

古ぼけたベンチ

少年は知っていたのか

埃まじりの陽の光の向こうに

寂しさの判ってくれる人々のいることを

私の心にはこんできた

青い空

ゆれるブランコ

いつの間にか

少年は帰ってしまった

それから公園はこわされ

かぞえきれない季節がすぎ

いつしか少年は老いて いま

澄んだ

秋の空を見つめている

透明な

十月の風が

ふと 忘れていた孤独を

疲れた

高橋美加子

あの日から

ひとは 想像のなかでしか生きられない
あの日

夜の月が人を攫つてゆくのを見
ているだけしかできなかつたのも

今日

雨が槍のように突き刺さるもの

全て想像の中のデキゴト

全ては瞬時に消え

ひとはまた

今という繰り返しを重ねて
新しい想像にイキル……

あの日から

道は

メビウスの輪

解けない謎

滝口 吉雄

雪 蛍

ふらつとびだして
寒い光の中をさまよいはじめる
空白のまま過去となる月日

ふとたちどまる

自分だけに背負わされた

風景の中で

冷えびえとした冬を感じて
涙を流しているのかも知れない
かぞえきれない生命たち

これも生きることなのかと
眼を上げると

弱々しい黄光の線を追つて

雪螢が

ひぐらしがひとつわ激しく
汗ばんだ皮膚の下を
つぎはぎのズボンを穿いた
少年が駆けぬける

かれこれ六十余年も前の
少年の背中で妹が泣く

ひときわ涙やかに舞う

ひぐらし

通り雨の向こうの林で
ひぐらしが鳴く

こびりついた抜け殻の残る
壊れたままの軒先

行き場を失つて碎けた光のような
短い日々に立ちつくむ

ふとたちどまる

風景の中で

冷えびえとした冬を感じて

涙を流しているのかも知れない

かぞえきれない生命たち

これも生きることなのかと
眼を上げると

弱々しい黄光の線を追つて

雪螢が

竹林 征人

日本の民主主義

日本の民主主義は市民革命を経て得られたものではない
絶対主義日本が総力戦の戦争に敗戦して、占領軍が起草
した日本国憲法からもたらされたものだ

その理想主義的民主主義の内容は日本人には

とても書けない程のものだった

その制度の元で日本国は経済的に成功しようとして

成功し経済大国になつた

その間政治的反権力闘争は、専ら学生運動に表れて

一般国民の革命運動の参加はなかつた

すでに政体は民主主義になつてゐるのだから

やがて経済的に豊かになると国民は政治を論ずるより

娯楽を求めるようになる

国は経済政策を重視し国民は猛烈に働いた

テレビが普及すると娯楽を求めた民衆は「一億総白痴」と書かれ「英雄不要論」が世相を煽り識者はこれを嘆い

て「日本の自殺」を書き、「民意」亡國論」を書いた

民主主義と経済大国の豊さは猛烈に働いて娯楽に興じ
芸能・芸術から学ぶ民衆を生ぜしめた

狂つたようなバブル経済の好景気が弾けたあと、東京の一極大繁栄と地方経済の衰退が続いて、最近の日本経済は全体的に衰弱してきたような状況だ

日本人が自ら選択したわけでない民主主義の制度の元の日本の中の政治は科学的というより感覚的・情緒的な政治になつてゐる

問題は「日本国憲法」の精神は、誇り高く歴史ある日本文化にどれだけ容れられるかだ

民主政治といえども日本文化の範囲でのことだ
それを踏まえたうえで

少しでも理解可能な社会であれば良いのだがと思う

白いいのち

外は 雪らしい

幽かな波動が 耳朶を掠てゆく

あれは 故なく故郷を追われた魂が

ひたすら 故郷を目指す足音だ

あの日大きな揺れが 地を裂き 大波を引き寄せ

慎ましやかな日常と 生を奪つていった

荒涼たる原野と化した 故郷の大地に

三月の空から降り注いだ 雪 雪 雪

雪は悲哀を封じ込め 時間を封じ込めた
それでも封じ込めない 人々の魂は
無明の闇夜を駆け抜け 急ぐのだ
生きた証しの 氏神様に辿り着くために

彼等は 故郷へ辿り着けただろうか
炬燵の上の蜜柑をひとつ 食めば
胸に広がる 透き通つたしづくの連なり
軒先にきらめく 白いいのちの眩しさ

丹治 計二

土

サツマイモを掘る

芋は畝に潜んで見えないので
傷つけないよう畝の外れから

大きなスコップで起こす

現れる芋の紅色は黒土にとても鮮やか

芋掘りは保育園の交流のための

毎年の賑やかな行事であった

今年 予定を一週間前にして

園にコロナ感染が発生 園は休園 芋掘りも中止

自分も感染したが 広い芋畠の芋掘りが私に残った

芋を掘る 土は静かだった

芋にとって畝は成長と休息の場所だろう
土からは微生物と有機質の匂いが立つた

中指の太さで三十七センチもの巨大ミニズの出現の驚きは
土もミニズも健康の証と嬉しい

肥しは まきストーブの灰と落ち葉と小糠
スコップと人力だけで

毎年 百本の苗から三百五十個ほどの芋ができる
土は食べられないが 食べものを生む

土は土のまま 命を実や葉へ花へ
また実に戻るもの助けて 名前を持たない

この当たり前の循環に愕然となるのは

一人 土に向かってのためだらう

* 「人はみな陸の一塊」の詩句

自分もまた一塊

士さん あなたは誰ですか

今も 悲惨な戦いの目的としての領土ですか
食べ物のため人が利用する機能の一部に過ぎないのですか
風も土も分けられない 柔らかな命もまた部分ではない
(一即一切 一切即一)
土を掘る 本当の土を掘る
優しさの土がある

* 誰がために鐘は鳴る

浜津 澄男

高校三年生

私は、舟木一夫が歌う「高校三年生」が、とても好きである。舟木は、高校時代という青春をテーマにした、この曲を、やや翳りのある美声で歌っている。聞き入ると、高校を卒業した頃や、今まで生きてきた道程が、浮かんでくる。

この曲が発売になつたのは、昭和三八年（一九六三年）で、私が、商業高校を卒業した頃である。この時期、日本は高度成長時期で、活気に満ちていた。新卒者は、金の卵と呼ばれ、厚遇された。私の友人、同級生らも、銀行、上場企業、役所などに就職していた。大学に進んだ者もいた。親友のY君は、大手の電器メーカーに就職し、東京に行つてしまつた。

私は、父が営む、製菓業である飴屋に従事しなければならなかつた。茶玉・黒玉・ヅツキリなどを製造した。うす暗い工場で、沸騰した水飴で火傷をつくりながら、汗をふきふき動き回つた。

自分を悲劇の殻に閉じ込め、詩作をするようになつた。

萩原朔太郎の〈月に吠える〉の病的な感覚の世界に魅了され、どうしようもなくなつてゐた。喫茶店で、詩を書いたり、電車で小旅行もした。猪苗代湖や、いわきの海などである。

私の書いた詩作品「深い海の魚」が、ある全国学芸コンクールで入選一席になり、授賞式が東京であつた。久し振りに会つたY君が喜んでくれた。

その後、私は、飴屋を辞め、サラリーマン生活を送つた。そして、しばらくして、ラーメン店を開業し、現在に至つてゐる。女房に助けられている。

郡山駅の東口に「高校三年生」の歌碑がある。平成一四年（二〇〇二年）に建立されたものである。

この曲の作詞者は、丘灯至夫である。丘灯至夫は小野町出身で、私と同じ、郡山商業高校を卒業している。東口は、繁華街などがある西口に比べ、乗降者が少なく静かである。歌碑が、ひとつそりと建つてゐる。

（残り少ない　日数を胸に／夢が羽ばたく　遠い空／ああ　高校三年生　ぼくら／道はそれぞれ　別れても／越えて歌おう　この歌を）舟木の声とメロディーが、流れてくるようである。

数年前、Y君は亡くなつてしまつた。

廣川 秋男

四季の風景

この国には四季の風景がある

啓蟄の賑やかな風景は全ての生命を目覚めさせ野に里に花を咲かせ

万物が萌え小さな命たちの歓びの春だ
紫陽花がほころび始めると梅雨がきて

人々の心を洗い清めて褐色の肌色の
若者たちの健康な心は恋を歌う

若者の成長を促す太陽の季節だ
若者の季節が去ると秋は熟年の季節だ

樹木は地上に実を熟成させて実直に
一年を振り返りながら大人たちは

未来の子らに大地を譲る大切な
一年を振り返りながら大人たちは

未来の子らに大地を譲る大切な
一年を振り返りながら大人たちは

やがて人が生きるということを
試される冬の季節だ

忍耐と勤勉がいかにすぐれているかを
神が人々に与えたただ一つの季節なのだ

この季節がなかつたら人々は
恵みの太陽を得ることは無かつたろう

そして人々は冬を最高の季節と思うだろう

元旦の日にだけ咲く花はないか

元旦の日にだけ咲く花はないか

除夜の鐘を撞く午前〇時に

地の底からもくもくと動き出して
午前一時になると小さな芽が出てきて

二時に二枚の葉が幼い児の手のように
未来を掴むように伸びてきて

三時に太い幹と多くの枝が広がり
四時と五時には枝いっぱいの苔がついて

六時のひんがしの空が明るんだとき
昇りゆく太陽と一緒にばあつと開く

そんな美しい元旦の花はないか
待ちこがれた人々ための

豊かなひとにも貧しい人にも
病気のひとにも健康な人にも

嫌な事や悲しい事を忘れない人の為にも
たいらかに咲く元旦の花はないか

幻に消えて次の年の元旦には
昇る太陽とともに大輪に花ひらく

そんな元旦の日の真っ赤な花はないか

福西トモ子

新 盆

新盆を迎えた日

色鮮やかな菊の香りがただよう
玄闇に下げられた迎え火の提灯が
天空を照らした

希望の輝きか失意の暗闇か

自由となつた今

孤独が常に付きまとつて

誰にも告げることはできない

生きてきて

私の淋しさも誘われて

永遠と言う言葉が

過ぎてきた重みを感じる

大切な祈りの声をのみこんだまま
迎え火の明かりが揺れる

前田 新 霧

秋が冬へ

季節が移る通過儀礼として

会津は深い霧に包まる

霧は淡い陽を遮り

盆地は霧のなかで遠近を失う

飛来する白鳥が霧を搖する

昼近く山嶺が霧のなかから現れるが

また霧のなかへ隠れてしまう

朦朧とした日常がやがて終わる

夜天にオリオンが昇り

会津は白銀の世界に変わる

その移り変わりを

無意識に繰り返して八十五年が過ぎた

私はいま、深い霧のなかにいるという

錯覚にとらわれる

すでに私の天空には

冷涼とした冬の星座が懸かる

霧は私の冬への通過儀礼だ

往生という仏教の生死観に

私は無縁だが

霧が醸す薄明と静謐の環境は

ここで越し方を顧みるため

霧が私に与えた機会なのであろう

松坂 佳生

生物たちの初夏の旋律

初夏の早朝に光と風が交差し

東側の扉をゆっくり開く

大きな針が回り始め

小さな針が少しづつ移動する

神が目覚め

自然の時が動きだす

宙から素敵な声が聞こえる

小鳥たちが朝食の準備に忙しい

若葉の枝と枝に止まり

小さなピンセットの口ばしで

朝食を摘まんで

美しい薄緑色の粒子の中に飛んで行く

光に溶けた花たちが

薄い桃色や山吹色 薄紫色に染める

放射状に吹く風に

隣の花びらと花びらが抱擁をしている

人間たちに

今日の初めの言葉が産まれ

生きている音を繰り返し

心の瞳が蒼天の中を散歩している

ラベル作曲の「ボレロ」の旋律のように
五線の中の音符が踊っている

日常の生活が笑顔と負の中で

人間の通る道を繰り返し

人間の生きていく中で活きている

陽が登り 陽が沈む

明日もここから生まれる

みうらひろこ

秋の味覚はいかがですか

亡夫の書棚の隅っこから

詩人小熊秀雄が

佐藤春夫に対する諷刺詩を紹介している

古い雑誌をみつけた

貧しい小熊は毎日毎日さんまを喰い

牛肉を喰う佐藤春夫を皮肉っているのだ

若くして逝つた小熊は

今や庶民には高値の花となつた

さんまのことなどご存知ないのだ

毎年 „ゆうパック“ で三千円コースの

さんまのパックを送つていた私

かつては三千円の箱に三十四が

八匹きり入つてなかつたと

送つた人からの電話にのけぞつた

„サンマ“ は獲れない・高値

全国の郵便局の目玉事業だつた

„ゆうパック“ のパンフから姿を消した

秋の味覚 „秋刀魚“ は

そのうち文字が變つてしまふかも

散歩していた秋めいた日

金木犀の香りに交つて

さんまを焼いている匂いが

おおとばかり匂いの元をたどれば

高嶋の門構えのリツチ そうなお宅

味覚を味わうにリツチとは関係ない

きつと風流人なのだ

私も負けてはおられません

秋刀魚の缶詰もあつたつけ

今年は梨の出来が良く

一山五百円の安さにほだされて求めた梨だ

たつぶり味わつてみましよう

仏様に供えた栗羊羹もね

三星 賢二

あなたは何者ですか

私の人生を決めていたあなた 何者

私の現実から離れることのないあなた 何者

過去、現在、未来を決めているあなた 何者ですか

能力と役割と運命を決めているあなた 何者ですか

あなたが気にいった私の幼児期の顔
じっと限界を見つめる目
現実の底を見たいと身構えた目

成長することに表情が変わり分相応の顔になった
輝く未知の世界に思いを馳せ

後に向くことなく成長した主人公・私の壮大なドラマ
想像力と創造力に溢れた主人公・少年の顔であった

それから何度も季節は巡り

存在感のある身の立つ立場を選択した青年・私

一途な真っすぐな感性は共感し

選択を拒むことなく真摯に尽くした青年・私

伸し掛かる負担の重さを越えた未知の世界に
信念と孤独に徐々に病んだ青年
更に 季節が巡り

立場の底を見続けた感性は心を奪い
顔と心に距離ができた
その日その時の顔になる
しかし だれもが認めた顔

だれにも知られたくない秘めた顔になった
あなたが書いたドラマ

長い長い時の流れのままに誠実に生きた老来の身
底を見続けた顔

居場所に惚れた顔
全くすことに惚れた顔

人生に惚れた顔

生まれ故郷に帰る幸運な老残の身の穏やかな顔

あなたの望んだ相応しい顔になつただろうか

油井憲一

話す

ガラケーが世の中に出了た

スマホが人間をとりこにした

インターネットで

出歩かなくともバンバン仕事が出来た

オンラインですべてが仕上ると思つた

世界中が便利になつて

七十余億の人間が歓喜した

無機質が発する

音と画面の合理主義にすっかり酔つた

人間は文明に流されて
でも耐え難い寂しさは何だろう

話をことを忘れてしまつてゐる

話せば心が見えるのに

につこり笑え合ひるのに――

こたつ

山に行つて枯れ木を

薪にしていた時代があつた

それから重油が燃料になり

更に進んでプロパンガスになる

それが進化して電気になる

目に見えなくて燃えていると言う不思議

我が家の電化生活の物語り

ボタン一つで何でも出来る生活は

暮らしの究極とさえ思ひた

でも物心ついた時から

こたつを囲んだ暮らしが

俺を引きつけて離さない

魔法の力があつた

その温りが肌に付いてゐる

若杉 縷縷

力オスの中に

沖縄の
竹富島を

牛車で
揺られている

ゆつくり のんびり
ゆつくり のんびり

時が止まつたかのように

急行列車に乗り
人生の半分は
過ぎていつた

今 もはや 月日は

遠くなりつつ

虹の彼方

カオスの中に

ゆつくり 静かに
沈んでいく

わたなべえいこ

橙色が視線の先に

通る人の目に触れやすい場所に
果実四個ついているミカンの木を

植樹した

山茶花の傍らに

私の腰あたりの背丈の

今日

明日かと命を全うしようとしている百五歳の義母

椅子に腰を落として視線を向けていた

ちょうどその角度が收まる場所

これから先

ミカンが育つて

もつともふさわしかった場所

枝が伸びだして

遠くからでもすぐ見分けることができる

風景になるだろう

いつも誰かが訪れて

柔らかな眼差しを傾けていた義母
もつと早く気づいて
その風景を提供していたなら
楽しみの時間が増えただろうに
ちょっと後悔したりもする

私も

夫もいなくなつても

樹木となりたわわに橙色の実をつけた
シンボルになるだろう

(風舎17号)掲載

渡辺 孝行

秋の時代

そのことがあつたときは

まだこの世にいなかつたが

あのことがあつた日は

いまこの世に起きたことにおどろき

どうするかを おもいつめた

時代は そのときはじめて貌を見せ

俺の胸ぐらを掴んだのだったが

その手を取つたり 払いのけたり

いくつもの時代が それからもあつて

ここまでくることができた

それはまさしく無限の前に振る腕の

“ゆあーんゆよーん”と

鳴らせた無窮の風の仕業であつて

時代の雲をたなびかせ

侘びしみじみと寂び立たせるのだった

おもえば幾度も
永遠に見とれ

われを忘れることがあつたのは

時間の行間から差し出される

時代のバトンを受け取るためだつた

そのとき突如 声があり

「盲目の秋」の巫女 琳琅を振り
われら刮目し

百年の風穴に衝する

詩韻の奇跡に打たれ

人間の道へと立ち返る

いまここからの近代

時代とはわれらの蜂起のこと

未だ果せぬ詩と文化の糾合を

鼓舞する不滅の秋の出会いのこと

(2022年「詩祭」をかえりみて)

編・集・後・記

(安部一美)

習う等、日頃から自分達の問題として考慮すべきだらう。

★近年、県内の詩誌の終刊が目立つが、寂しい限りである。現存している詩誌や団体数は、本詩人会発足以来、人物や時流にも左右されたとしても、最低ではなかろうか。

★いま、ここで詩誌の効用や、終刊に至る個別の事情を詮索する積もりはないが、終刊までに次の様な理由や原因があつたことだろう。

一定の活動期間を初めから決め、終期を迎える終刊とし

たものは、潔く褒め称えよう。次に会員の減少によるもの。更には、取りまとめ的主宰者が不在となつた等が考えられる。

★ウクライナ侵攻、コロナ禍など厳しい現実の下、この福島県現代詩集、第四四集が発刊されたこと、とても嬉しく思います。原稿を寄せて下さった方々、ありがとうございます。現在、木村拓哉、主演映画「レジエンド&バタフライ」が、話題になつてゐる。戦国武将、織田信長の生涯の映画で、濃姫との愛も加わり、混迷する現代社会に通じるものがあるからであらう。キムタクの魅力が凄いようである。

(浜津澄男)

★片や会員を増やし、活力ある詩誌もあるが、そこでは賛助会員を擁し、資金面でも援助して頂くなど、工夫しているようである。活動中の詩誌は、こうした施策を見

★令和四年七月十二日麵ショップシコシコにおいて第一回編集委員会を開催した。参加者なんと安部一美さん、浜津澄男さん、そして、私である。

事前に資料作成し、刊行の工程、印刷所、発行数の確

認等を決めて、その後、編集委員長を決定し、一回目の会議は終了した。編集委員長は、自然の流れで、私に決定した。

★最初の作業は、諸事情による詩作品の締切日を一ヶ月早めにするお知らせである。その後応募要項と印刷代の振り込み用紙を同封し、会員、非会員と外部団体に、九月下旬に発送した。

★十二月一日の締切日、想定内であったが、作品を確認したところ半数近くが届いていなかった。会員方々の健康状態や、新型コロナウイルスの影響で詩作品の制作に集中できなかつたのだろうと思った。

★令和五年一月上旬に初校正（グラ刷り）送付。2次校正は一月下旬に送付し、返信後、編集委員会で確認、二月中旬を目安に発行していきたい。

★最後になりますが、新型コロナウイルス感染が高止まりの中、また、高齢で健康状態が思わしくない状況で、今回二〇二三 福島県現代詩集四十四集に応募していた

だき、お礼とリスクをいたします。誠にありがとうございました。

★ただ、しっかりとルールを厳守して、期限日時、作品内容の確認・点検し、作業にあたつていただければ幸いです。

（松坂佳生）